

# 伝統芸能の継承に関する考察

## —江州音頭の継承活動の現状と課題—

萩原多美子

### 概要

本研究ノートは、江州音頭の継承のための活動の現状を明らかにすることを目的とし、滋賀県の江州音頭の保存・継承のために活動を行っている団体・個人からの聞き取り調査とアンケート調査の結果と考察を報告するものである。

昭和初中期以降、全国各地で伝統芸能・郷土芸能の継承問題が課題となっており、江州音頭においても同様に江州音頭に興味関心を持ち継承活動をしている人々の高齢化と、地域住民の江州音頭に関する興味関心が無くなりつつあることが課題となっている。これらの問題に取り組むために、改めて現在の生活様式や人々の価値観（何を娯楽と考えるのか）に適した新しい形の江州音頭の在り方と普及の仕方を見つけることで、継承問題の解決策となるのではないかと考える。

調査の結果、滋賀県が運営する江州音頭普及会は普及・継承には注力されていないことが、民間団体である滋賀県江州音頭協会の会長の松本氏からの聞き取りでは、多くのイベントにより多くの団体や個人が参加できるように努力していることが、滋賀県で活躍するプロの音頭取り（江州音頭の唄い手）からの聞き取り調査では滋賀県に存在する組織では江州音頭に関わる各団体や個人の全貌が把握されておらず、その活動の横のつながりの薄さが課題であることが分かった。また大津江州音戸保存会の会員に行ったアンケート調査からは、江州音頭の普及や継承にはあまり思いは無く、個人的な嗜好や興味から活動に参加していることが明らかになった。

### 1. 背景と目的

江州音頭とは、「現在の滋賀県東近江市の八日市地域（旧八日市市）で発祥し、近畿周辺地域に広まった踊り口説である。江戸時代末期の、近江国神崎郡御園村神田の西澤寅吉が、山伏から具（歌）祭文を習い、これを昔から伝わる音頭に加味してうたいだしたものである」（丁野2017）。

江州音頭は屋台音頭と座敷音頭に分かれている。屋台音頭は戸外で行われ、座敷音頭は室内で演じられる。屋台音頭は多くの場合において盆踊り大会の会場の中心に櫓を組んで、音頭取り（江州音頭の唄い手）が櫓の上で太鼓、鉦、三味線などのお囃子と共に音頭を唄い、その周りを人々が踊るための唄である。一方座敷音頭は室内で演じられ、基本的にはお囃子は無く、江州音頭の節を取り入れながら物語を聞かせる音頭である。

筆者が幼かった頃、1970年代には盆踊りが非常に盛んであった。櫓を囲んで踊ることは地域住民の子供から大人までの楽しみの一つであった。友達と一緒に盆踊り大会を楽しみにして、自分の自治体や近くで開催されていた複数の盆踊り大会に参加していたことを思い出す。この頃には小さな集落を含め、多くの地域で夏には盆踊り、秋には敬老会などで座敷音頭のイベントが開催されていた。しかし1980年を過ぎたころから、盆踊りの数は激減している。これはテレビやゲームなどの娯楽が盛んになり、加えてエアコンの普及が進んだことで、涼しい環境で楽しめることが増えたことが要因と考えられる。これに伴い、自治体が協力して活動するという意識も薄れ、盆踊りと共に座敷音頭の

イベントの開催も減少していった。

筆者は江州音頭の発祥の地、東近江市（旧八日市市）で生まれ育った。筆者の父親が20代後半（1970年ごろ）に江州音頭の魅力にひかれ、当時大津市で活躍していた音頭取りに弟子入りし、プロとなり、食堂経営をしながら、その後72歳で他界する1週間前まで唄い続けていた。その間に母も江州音頭を始め、両親共々に音頭取りとして活躍していた。私も幼いころには音頭を取り、太鼓や鉦のお囃子もしていた。その当時は夏になると毎週末のようにどこかで盆踊り大会が開催され、冬には主に老人会向けのイベントとして、座敷音頭のイベントも多く開催されていたため、音頭取りは大忙しであった。300人程度の小さな自治体でも青年団を中心に地域住民が協力して盆踊り大会や座敷音頭を開催しており、加えて開催日が重ならないように自治体間での連携も取られていた。その頃の自治体は盆踊り以外の行事にも積極的に参加し、また自治体間での連携も今とは比べ物にならないくらい活発に行われていた。

現在、盆踊り大会や座敷音頭のイベントが激減している状態をととても寂しく感じる。また江州音頭のイベントは、地域住民が一体となって準備を進められていたが、盆踊りの減少とともに地域の一体感が無くなってしまっている状態も問題であると考える。また、本研究を開始して以来、機会があれば学生や近所の主婦らに尋ねているが、滋賀県民であっても、特に40歳以下の人たちは、江州音頭を知らない人が多いことを実感している。

研究の目的は、滋賀の伝統芸能である江州音頭の継承と、それを通して地域活性化に資する取り組みとして、また滋賀県の地域住民の江州音頭に対する関心を高めるための、新しい改善策を明らかにすることにある。本研究ノートは滋賀県内における江州音頭の現状とその課題を明らかにするために行った予備調査（関係者ヒヤリングおよびアンケート）の結果について報告するものである。

## 2. 伝統芸能・郷土芸能に関する先行研究

本田（1986）は、「伝統芸能は、郷土芸能、民間芸能、ふるさと芸能などとも呼ばれる。即ち、祖父の代から伝えられてきている芸能、民俗行事として、民間に、郷土に伝承されてきたもの、土地に根付いた芸能と言うことである。それらが一段の洗練を経て舞台のものとなり、それを専業とする人々も出るに至った」と定義している（本田1986）。

伝統芸能・郷土芸能に関する先行研究として長野県飯田市立竜狭中学校における今田人形の継承活動（長坂・奥2003）と秋田県仙北市角館の芸能の保存と継承の事例（桂2007）、そして郷土民謡「江州音頭」の歴史的考察とその改善（草川<sup>1</sup>1963）を取り上げる。

長坂・奥（2003）は、音楽教育学的視点から見た郷土芸能の伝承に関する質的研究を行っている（長坂・奥2003）。長野県の伊那谷（現：飯田市）には、約300年の歴史を持つ人形浄瑠璃が今日も伝承されている。全国各地の郷土芸能がそうであるように、伊那谷の場合も、急激な社会変化の中で人形浄瑠璃の愛好者が減少し、第2次世界大戦後には存続が危ぶまれた。この飯田市龍江地区（旧今田村）に伝わる今田人形の伝承活動として、飯田市立竜狭中学校で1978年に「郷土クラブ今田人形班」が発足し、1980年からは「今田人形クラブ」として、毎週のクラブ時間を中心に今田人形座から芸名の指導者を招いて意欲的な練習・公園が行われるようになった。学習指導要領の改訂に伴うクラブ時間の削減により、「今田人形クラブ」もそのまま存続させることは不可能になったが、活動の形態を変えながら、現在は総合学習の一環として、今田人形の継承を図っている。

桂（2007）は、秋田県の地方都市である角館（現仙北市）とその周辺で担われてきた、日本音楽を含む芸能の盛衰について地元紙を調査している（桂2007）。今後の芸能の在り方について示唆を得ることを目的とし、西洋音楽を除く各種目の民族芸能や音楽関連記事の掲載数から芸能の盛衰について概観している。秋田県には

<sup>1</sup> 草川一枝氏は1926年生まれで、滋賀刑務所篤志面接委員、滋賀大学名誉教授を務めている（2022年11月21日閲覧 <https://blog.goo.ne.jp/initiative/e/30e1870b1c87adb7d28544007b20680e>）。また、『高齢者のレクリエーション』、『小学校運動会の種目と運営』をはじめとする、著書5冊の執筆をしている（2022年11月21日閲覧 <http://webcatplus.nii.ac.jp/webcatplus/details/creator/38553.html>）。

民謡、祭囃子、盆踊り、番楽など多くの郷土芸能が伝承され、一つの地域は複数の音楽を有しており、地域の音楽文化は複合的である。産業構造の変化やそれに伴う生活様式、共同体の変化により、伝承が途絶えたものが多いとし、現在に至るまで伝承されてきた芸能も、舞台芸能化し、見せるための芸能に変質し観光と結びつくなど、演奏の場や担われ方を変化させているとし、郷土芸能を昔ながらの方法で伝承していくことは困難であると述べている。時代の流れに適応し、伝承される環境をつくりだしていくことが重要であると言う。また過疎化と人口の減少のある地方においては、これまでの地域の枠を超え、参加する住民の層を広げることにより、より広い範囲の地方色を演出するとともに、観光客など外部の人も取り込みながら、新しい演奏の場をつくりだしていくことが重要ではないかと述べている。

草川（1963）は、江州音頭を郷土民謡と捉え、その歴史的背景を考察し、継承のためには生活の変化に伴う新しい民謡の誕生が改善策であると述べている（草川 1963）。滋賀県内における盆踊りの起源は、戦国時代に織田信長の火打ちにあった滋賀県愛知郡日枝村（現 犬上郡豊郷町）にある千樹寺の再建の際に、参拝の老若男女を集め手踊りをしながら、夜が明けるまで踊り明かしたことに端を発する。その後 1845 年に、滋賀県八日市市（現 東近江市）に住んでいた西澤寅吉が現在の江州音頭の起源となる音頭を作り、江州音頭の盆踊りに一層の拍車をかけた。その後昭和初期まで江州音頭は人々の娯楽の一つであった。しかし生活様式の変化に伴い、その人気は衰えていく。草川（1963）は、学習指導要領が改定され学校教育の分野にレクリエーションが位置づけられ、教材にも「郷土の民踊のもっている味わいを活かして踊ろう。」として民踊が取り上げられているが、わが郷土に古くから伝わる江州音頭がこのままでは果たして教材として適当であろうか」と問題を提起している。近年「故郷の民踊」の特集の事業が全国的に進み、埋もれた郷土の文化をよみがえらせる事業が進み、江州音頭も近代的感觉に満ちたメロディによる新江州音頭が誕生した。草川（1963）は、江州音頭に明るく楽しいレクリエーションとしての価値を含めて一層の普及に努めたいと述べている。

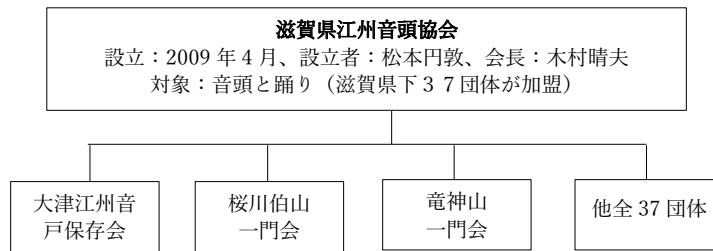
このように先行研究では、多くの伝統芸能・郷土芸能において、我々の生活様式やそれに伴う価値観の変化と共に、主にテレビなど他の娯楽が普及してきた昭和初期頃から、その継承問題が取り上げられている。人々の伝統芸能に対する興味関心が劇的に薄れてしまった結果、演奏や演出の機会が激減してしまい、各地で継承・普及問題への対応策が取られている。

### 3. 滋賀県の江州音頭の保存と普及のための組織

先にも述べたように、江州音頭は 1808 年生まれの西澤寅吉が祭文に節回しを加味し次第に人気を博すようになり、弟子の 1839 年生まれの奥村久左衛門の協力を得て「江州音頭」として大成した。丁野（2017）は、元々のネタである「祭文」に他の音頭の要素を取り入れて独創的なモノにしたのが寅吉の江州音頭であると述べている（丁野 2017）。その後、江州音頭は寅吉の芸名である桜川大龍から桜川一門と、彼の弟子であった奥村久左衛門が独立して、芸名である真鍮家好文から真鍮家一門となり、この 2 大家元が弟子を育てながら江州音頭を広めていくことになる。そしてそれぞれの弟子たちが独り立ちをして、また新しい門下ができいく。それを繰り返して、現在では何十という門下が存在し、それぞれが独自の節回しを作ったりしながら、思い思いに江州音頭を行っている。その全貌は滋賀県も把握しきれていない。

1950 年以降各自自治体で取りまとめができるように、市町村ごとに江州音戸保存会が設立されている。現在すべての保存会は把握されていないが、例えば江州音頭の発祥の地である東近江市（旧 八日市市）では、1972 年に八日市江州音頭保存会を創立し、現在会員総数 27 名で活動をしている。また大津江州音戸保存会は 1956 年に設立され、16 名の役員が、加盟している各地 8 団体の取りまとめをしている。

そして県下全体を取りまとめるために、滋賀県は 1984 年 4 月に「滋賀県江州音頭普及会」を設立した。会長は歴代の県知事である。しかし 2000 年以降、県として税金を江州音頭に使用することに反対する声上がり、規模を大幅に縮小し、現在では活動そのものも最低限しか



図表 1 滋賀県江州音頭協会の組織の概要

行っていない。そこで伝統芸能の普及と継承に熱い思いを抱いていた松本円敦<sup>2</sup>が2009年4月に音頭と踊りを取りまとめるための「滋賀県江州音頭協会」を設立した。この時点で県は「滋賀県江州音頭普及会」を縮小し、活動のほとんどを「滋賀県江州音頭協会」へ引き継ぐ形となり現在に至っている（図表1 滋賀県江州音頭協会の組織の概要）。

#### 4. 江州音頭の現状と課題を明らかにするための調査

##### 4.1 調査方法

本研究の予備的調査として、江州音頭の現状と課題を明らかにするために、聞き取り調査とアンケート調査を行った。聞き取り調査の対象は、県が運営する滋賀県江州音頭普及会の実行委員2名、滋賀県江州音頭協会を設立した松本円敦氏、筆者の父の弟子2名である。加えて大津市江州音戸保存会の会員からのアンケートを実施した。アンケート調査の結果はテキストマイニングを使い分析を試みた。

##### 4.2 調査内容

###### 4.2.1 滋賀県江州音頭普及会からの聞き取り調査

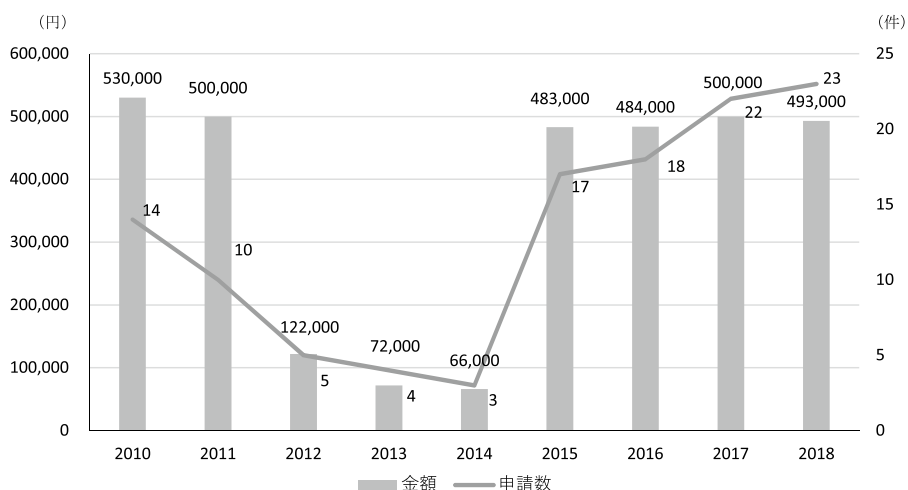
2022年9月6日に滋賀県商工観光労働部観光振興局に出向き、滋賀県江州音頭普及会の県職員の実行委員2名から聞き取り調査を行った

結果、以下のことが明らかになった。

滋賀県江州音頭普及会は江州音頭の普及のために、県が1984年（昭和59年）3月に観光振興局に設立した。当初は実行委員の数も今より多く、活動も積極的に行われていたようである。しかし2000年代には、江州音頭の普及に県の税金を使うことに反対する声が多くなり、現在のように2名にまで縮小されてしまった。

筆者が聞き取りをした実行委員は今年度から担当になり、今までの活動の歴史や、江州音頭に関する新たな情報は得られなかった。また、県内に存在する団体や個人に関しても把握されていない。実行委員の主な職務は、年に1回加入している団体のいくつかから記事を集め「江州音頭だより」を発行と、年に1回開催する滋賀フェスと京都フェスの手伝いを行うことである。活動は会員主体であり、それぞれが思いのままに活動をしており、実行委員が関わることはない。江州音頭の普及のために実行委員が取り組んでいる活動は特に無いが、助成金制度を設け、その管理をしている。滋賀県商工観光労働部観光振興局から取得した助成金交付に関するデータにより推移を見た（図表2 助成金交付実績）。2012～2014年を除き毎年約50万円の助成金が交付されている。その3年間の助成金申請者は大津江州音戸保存会のみであり、またイベントの開催数が激減している。2015年から申請数が増加していることから江州音頭に関するイベントが増加していることが明らかとなった。しかし交付合計金額は2010年のレベルと同じであることから、各々の申請への支払金額が減少していると言える。

<sup>2</sup> 松本円敦氏は、1944年生まれで、子供の頃から芸能一般に興味を持っていた。現在では自身が設立した「滋賀県演芸学会」の会長、滋賀県江州音頭協会の最高顧問として滋賀県の伝統芸能の保存と継承に尽力している。



図表 2 助成金交付実績

出典：滋賀県商工観光労働部観光振興局提供のデータを元に作者が作成

また、現状の課題についてたずねたが、継承問題はあると聞いたことはあるが、詳しくは把握していないとの回答であった。

これらのことから、滋賀県として、江州音頭に関する情報の把握は十分なされておらず、また、県として加盟している団体の横の連携を築くことはないこと、そして江州音頭の普及や継承問題に注力していない現状が明らかになった。

#### 4.2.2 松本円敦氏からの聞き取り調査

2022年5月13日に、松本円敦氏からの聞き取り調査を行った。

県が運営する滋賀県江州音頭普及会の縮小化を受け、2009年4月に松本氏が滋賀県江州音頭協会を設立し、現在は県に代わって組織的に普及活動を行っている。滋賀県江州音頭協会には、滋賀県下27団体が加盟している。因みに、松本氏によると県が運営する滋賀県江州音頭普及会には滋賀県下41団体と個人21名が加盟しているとのことである。なお、松本氏は踊りの普及のために2016年4月に滋賀県江州音戸保存会を設立し現在37団体が加盟している。また松本氏が居住する大津市に音頭と踊りの保存と普及をするために、1956年4月に設立された大津江州音戸保存会の会長も務めている。この3つの組織を集約して松本氏の監修のもと、

大津江州音戸保存会としてホームページが開設されている。

もともと松本氏は芸能全般が好きであったこともあるが、「青年の時、青年団にあこがれた」ことが江州音頭を始めたきっかけであるという。その後江州音頭がだんだんと廃れていくことを問題と捉え、「滋賀県の伝統芸能として継承しなければ」という強い思いから組織を立ち上げたとのことである。

昔から江州音頭は個人が思い思いに行っており、又市町村の保存会はそれぞれが連携することなく活動を行っていた。松本氏は先に述べた滋賀県江州音頭協会と滋賀県江州音頭保存会を通して横の連携を図り、新しいやり方で江州音頭の普及に努めている。例えば複数の音頭取り(唄い手)や各地の保存会と連絡を取り合って、大きな盆踊り大会に派遣している。これは横のつながりが無くてはできないことである。

また、元来音頭取りは個人で弟子を持つことで、門下を継承していた。一方で松本氏は門下に関係なく、現在、滋賀県、京都、大阪で江州音頭の教室を開催している。これは今までのやり方や考え方を大きく変えた事例である。その教室には50歳代の生徒も参加していることから、松本氏は江州音頭の継承や普及を阻害している要因は高齢化だけではないと語る。もっと重要な問題は、クーラーやテレビが普及してから祭り自体が減っていること、実際に自治体が

盆踊りの予算を取らなくなったこと、住民の踊り手（参加）が無くなっていることであると考えている。いくら音頭取りや保存会に入会する踊り手が増えても、盆踊り大会や祭り自体が減少している、また盆踊りに参加して踊ることが楽しいと思う住民がほとんどいない状態では、伝統芸能としての江州音頭の真の意味での継承は難しい。

松本氏は江州音頭に携わる関係者は古い考えにとらわれずに暮らしの変化に気づき、考え方を改めながら活動する必要があると考えており、江州音頭の保存・継承活動にあたり、自然環境の改善と社会へ貢献するという観点から近年世界的に注目されているSDGsにも積極的に取り組んでいる。滋賀県江州音頭保存会では、特に環境とジェンダー平等に力を入れている。全てのイベントで、全てのごみを分別して回収している。また、男性が主導権を握っている江州音頭の世界で、男女の区別をすることなく受け入れや活動を行っている。加えて、2021年3月に滋賀県が独自に設定したマザーレイクゴールズ（MLGs）に、2021年6月に滋賀県江州音頭保存会として賛同者に登録している（URL3）。マザーレイクゴールズは「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会へ向けた目標（ゴール）で、MLGsは、琵琶湖版のSDGsとして2030年の環境と経済・社会活動を繋ぐ健全な環境の構築に向け、琵琶湖を切り口として独自に13のゴールを設定している（URL4）。滋賀県江州音頭協会が開催するイベントでは、湖の環境を守るために、ゴミを出さないことを徹底している。

#### 4.2.3 音頭取り2名からの聞き取り調査

2022年7月9日に亡き父の弟子であったA氏とB氏から、座談会形式で聞き取りを行った。A氏は今年から豊郷江州音戸保存会に入会している。豊郷江州音戸保存会は松本氏が設立した滋賀県江州音頭協会に加盟しており、A氏は協会の仕事を受けながら、また個人で江州音頭の仕事を取ったりしている。B氏はどの組織にも所属することなく、個人のネットワークで仕事を取っている。

今回の聞き取りでは両名共に現存する滋賀県江州音頭協会だけでは、各門下をまとめ切れてい

ないことを懸念に思っている。B氏は「県全体をまとめるためには県が運営する江州音頭普及会がもっと力を入れてやるべきで、そうでないと江州音頭は続かない」と述べている。現状、「多くの家元や門下が好き勝手にやっており、江州音頭は全く組織化されておらず、まとめ役もない状態である」とA氏は述べる。B氏は、音頭取りはそれぞれ自分が一番だと思っているので、自分のやり方や唄いまわしが違うと反発しあい、そこに軋轢が生まれるので、まとめることは大変難しいと言う。

コロナで活動の機会が少なくなったかという質問に対して、両名共にコロナよりずっと以前から江州音頭に関するイベント（盆踊りや敬老会での催しもの等）の数は激減していると話してくれた。今年に入ってようやくイベントの開催が戻りつつあるが、盆踊り大会をしても踊りの輪に参加する地域住民の数が激減しており、1～2人ぐらいの時もあると述べている。

組織ではなく個人で江州音頭の仕事を好んでしている両名からの話から、江州音頭の継承や普及のためにはまとめ役が必要であると言う課題認識があるものの、元々音頭取りが個人的に思い思いにやってきた歴史から見ても、今までのやり方では、県下全体をまとめ切れることは不可能ではないだろうかと考える。また、個人的に活動する場合、地域住民の盆踊りへの参加が激減していることを問題と思いつつも、何もできない、しない状態であることがよく分かった。彼らにとって江州音頭は自分たちの唄のお披露目の機会であるという意識が強く感じられた。

#### 4.2.4 大津市江州音頭保存会会員からのアンケート調査

2022年8月26日に大津江州音戸保存会が開催する定例の練習会に参加し、会員からアンケート調査を行い、得られた回答をテキストマイニングし、解析を行った。

テキストマイニングとは、定型化されていない文章の集合からなるテキストデータをフレーズや単語に分解して詳細に分析し、有用な情報を抽出する分析手法である。テキストマイニングの対象となる文章としては、TwitterやFacebookなどのSNSの文章、アンケート回答、

コールセンターに寄せられる意見や質問などがある (URL1)。

筆者が使用したのはユーザーローカルの AI テキストマイニングの共起キーワードの手法である。文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図である。出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画されていると説明されている (URL2)。共起とは、「自然言語処理の分野において、任意の文書や分において、ある文字列とある文字列が同時に出現することである。」と定義する (SRL3)。

練習会は大津市で月に 1 回行われている。アンケート調査当日は参加者数 10 名 (男：4 名、女：6 名) で、内 7 名からアンケート回答が得られた。回答者を年齢別に見ると、60 代が 1 名、70 代が 6 名であった。

アンケートの内容は、

- (1) 江州音頭、踊りなどを始めたきっかけや、保存会に入った理由などを聞かせてください。
- (2) 江州音頭に関する活動を継続的に続けてきた理由を教えてください。
- (3) 江州音頭のどのようなところが好きか、又は好きな理由を教えてください。

- (4) 保存会を辞めていった会員について、もしご存じであれば、辞められた理由を教えてください。

の 4 項目とし、それぞれの回答を分析した。

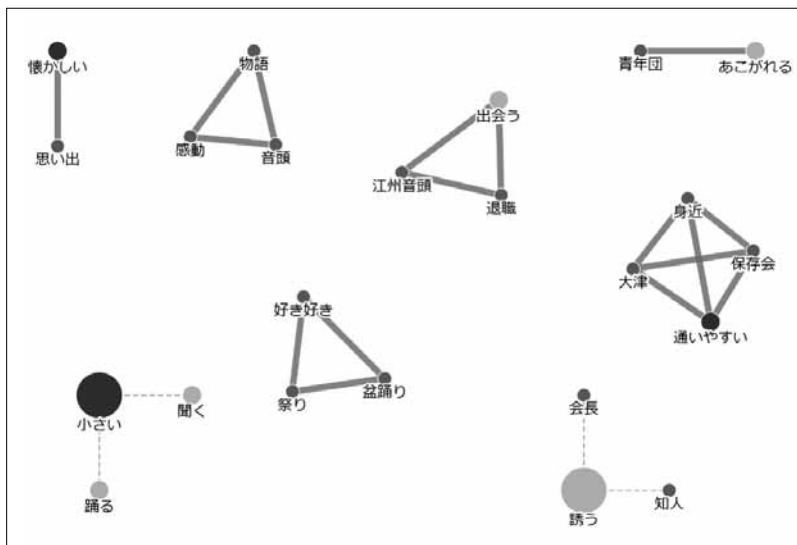
- (1) 江州音頭、踊りなどを始めたきっかけや、保存会に入った理由などを聞かせてください。

ここでは子供や若いころからのあこがれや懐かしさ、江州音頭のなかにある物語に感動した、昔から祭りや盆踊りが好きであるという回答が多かった。知人、会長など他人から誘われて入会したという会員が 2 名いた (図表 3 江州音頭を始めたきっかけ)。

このことから、回答者が若かった昭和初中期、すなわち江州音頭の全盛期を過ごした年齢層が会員になっていることがわかる。この頃は大人から子供まで盆踊り大会が大きな娯楽の一つであった。その時に感じた感動や懐かしさが江州音頭を始めたきっかけや、保存会に入会した要因であると考えられる。

- (2) 江州音頭に関する活動を継続的に続けてきた理由を教えてください。

この問いへの回答は、楽しい、無心になれる、仲間との活動が楽しい、音頭が好き、上手になりたい一心で、という回答が得られた (図表 4



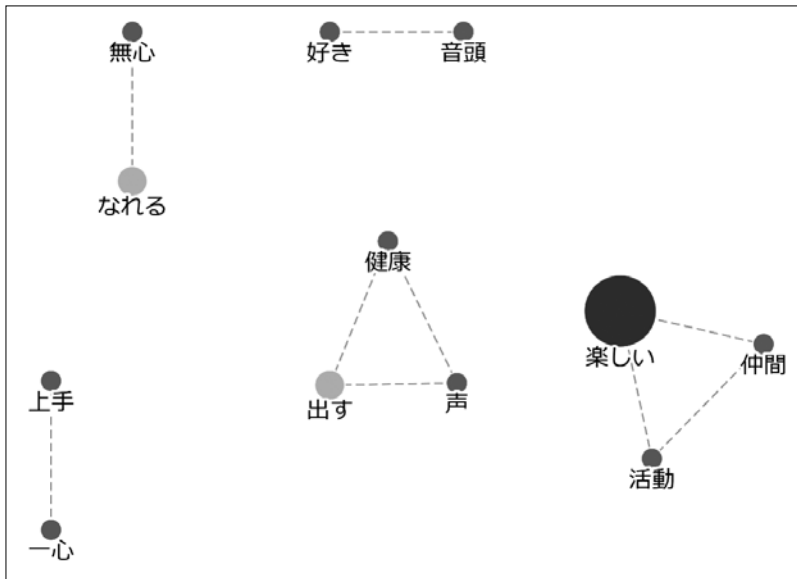
図表 3 江州音頭をはじめたきっかけ

江州音頭を続けている理由)。

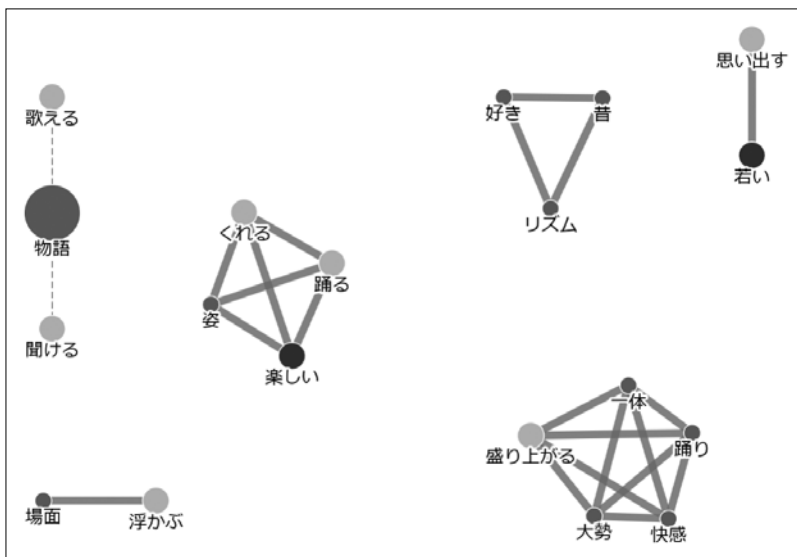
ここで注目したいのが、筆者が想定していた「伝統芸能の継承のため」という回答が無かったことである。会長の松本氏は伝統芸能の継承に関して強い思いを頂いている一方で、会員は自分自身の趣味や嗜好で江州音頭を続けていることがわかる。

(3) 江州音頭のどのようなところが好きか、又は好きな理由を教えてください。

この質問への回答は、江州音頭はストーリーになっている、場面が目浮かぶ、物語を歌える・聞ける、リズムなど昔から好きだった、若いころを思い出す、皆が踊ってくれる姿を見るのが嬉しい、健康のため、という回答であった

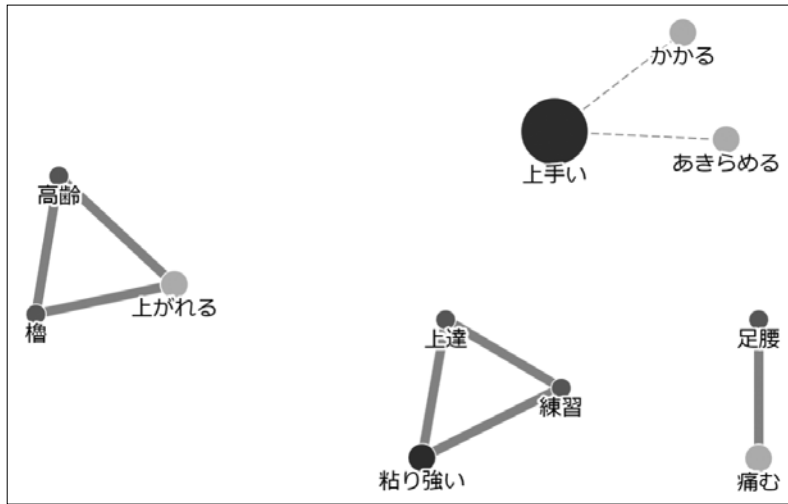


図表 4 江州音頭を続けている理由



図表 5 江州音頭のすきなところ





図表 6 江州音頭を辞めた理由

(図表 5 江州音頭の好きなおとこ)。

先に述べたように江州音頭は棚音頭も座敷音頭も口説きと言う物語を聞かせる伝統芸能であり、それを聞いたり唄ったりしたいという回答が多かった。また棚音頭は盆踊りのための唄でリズム感があり、それらの良さを好んだり、そのリズムに合わせて踊っていたことを懐かしく思う会員が多いことが明らかになった。

(4) 会を辞めていった会員について、もしご存じであれば、辞められた理由を教えてください。

この問いには 4 名の会員からの回答があり、高齢になり槽に上がれない、年のせい、足腰が痛むという内容であった。また、江州音頭をうまく唄えるようになるまでには時間がかかり、辞めていく人も少なくはないという回答があった(図表 6 江州音頭を辞めた理由)。

これらの回答は筆者が想定していた通りで、音頭取りや会員の高齢化の問題が明らかになった。

### 4.3 結果の考察

これら 4 つの聞き取り調査とアンケート調査から、それぞれの組織や個人で江州音頭に取り組む姿勢に違いがあることが明らかになった。

滋賀県としての江州音頭の普及・継承には注力されていないことが明らかになった。滋賀県

江州音頭普及会という組織を設立し、41 団体と個人 21 人が加盟しているが、活動自体は各団体・個人が思い思いに行っており、横の連携が無いという問題意識はあるが、そこへ介入する姿勢は見られない。これは県の方針であるとともに、県職員が務める実行委員は 2 年ごとに異動があり、十分な引継ぎがされていないことも大きな要因ではないかと考える。

松本氏は滋賀県の伝統芸能である江州音頭の普及と継承の重要性を強く感じ、組織を立ち上げて会員の勧誘、県全体の団体や個人の横の連携を取り、多くのイベントにより多くの団体や個人が参加できるように努力している。また元来は音頭取り個人が師弟関係になって継承しているが、滋賀県内に留まらず京都や大阪にまで範囲を広げ、誰でも気軽に参加できる練習会を開催し、江州音頭への入り口を広げている。

父の弟子 2 名からの聞き取り調査からは、まず滋賀県に存在する組織では江州音頭に関わる各団体や個人の全貌が把握されておらず、その活動の横のつながりの薄さが課題であることが分かった。また、組織に加盟しないことで、自分の好きなやり方で江州音頭の活動ができることに喜びを覚え、江州音頭の継承については問題であるという意識はあるものの、対策をしようという意識は薄いことが明らかになった。

保存会会員からのアンケートでは、保存会の会員の高齢化とともに、会員には江州音頭の普

及や継承にはあまり思いは無く、個人的な嗜好や興味から活動に参加していることが明らかになった。

## 5. おわりに

今回の調査を通じそれぞれの組織が江州音頭の継承・普及活動を行っているが、その活動の中心となっている会員は、ほとんどが70歳以上の高齢者であることが明らかになった。また、昭和初期に江州音頭の盆踊りや行事が盛んに行われていた人たちからの回答から、昭和後期以降、江州音頭関連のイベントが減少していることが確認された。草川（1963）は、伝統芸能を現代の著しく変化した生活様式に適合させるには歯車の食い違いを感じるとし、近代的感覚に満ちた新江州音頭を創作し、明るく楽しいレクリエーションとしての価値を含めて普及したいと述べている（草川 1963）。

1963年から約60年経った今、改めて現在の生活様式や人々の価値観（何を娯楽と考えるのか）に適した新しい形の江州音頭の在り方と普及方法を模索することで、地域住民の江州音頭に対する関心が高まるのではないかと考える。今後は現在江州音頭を知らない、関わりが無い住民への調査やワークショップの実施・分析を行い、課題の解決策を検討するとともに、郷土芸能の地域における役割・可能性に関し考察を進める計画である。

## 【参考文献】

- 本田安次（1986）『私のアルバム 伝統芸能の系譜』 錦正社。
- 丁野永正（2017）『滋賀の盆踊り江州音頭』 サンライズ出版株式会社。
- 丁野永正（2020）『近江の夏祭り江州音頭』 サンライズ出版株式会社。
- 長坂由美・奥忍（2003年）『飯田市立竜峽中学校における今田人形の伝承活動について－総合的な学習として行われる郷土芸能の伝承－』 岡山大学教育実践総合センター紀要、第3巻（2003）、pp.147-153。
- 桂博章（2007）『芸能の保存と伝承について－秋田県仙北市角館を例に一』 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文化・社会科学部門 62 pp.29-36。
- 草川一枝（1963）『郷土民謡「江州音頭」の歴史的考察とその改

善』 滋賀県大学学芸学部紀要人文科学・社会科学・教育科学 13 pp.150-145。

## 【URL】

1. 「テキストマイニングとは？手法や活用法を解説：株式会社日立ソリューションズ・クエスト」（2022年10月22日閲覧 <https://www.hitachi-solutions-create.co.jp/column/technology/text-mining.html>）。
2. 「AI テキストマイニング by ユーザーローカル」（2022年10月23日閲覧 [userlocal.jp](https://userlocal.jp/)）。
3. 「共起とは何？わかりやすく解説 Weblio 辞書」（2022年11月20日閲覧 <https://www.weblio.jp/content/共起>）。
4. 「マザーレイクゴールズ (MLGs) 賛同者の皆さま | 滋賀県ホームページ」（2022年10月24日閲覧 <https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/biwako/318132.html>）。
5. 「Mother Lake Goals 変えよう、あなたと私から」（2022年10月24日閲覧 <https://mlgs.shiga.jp/>）。